

高齢期に内在する死生観

杉原トヨ子^{*1)}, 阿部直美²⁾, 中柳美恵子³⁾

1) 大阪青山大学健康科学部看護学科

2) 日本赤十字社広島県支部

3) 五日市記念病院

An attitudes toward life and death in the hearts of the elderly

Toyoko SUGIHARA¹⁾, Naomi ABE²⁾, Mieko NAKAYANAGI³⁾

¹⁾Osaka Aoyama University

²⁾Hiroshima Prefectural Branch, Japan Red Cross Society

³⁾Itukaiti Memorial Hospital

Summary The aim of the present research was to define desirable nursing care for the elderly who seek peaceful death. Semi-structural interviews were conducted for elderly people living in nursing care insurance facilities and those living independently with ADL. We categorized the vocabulary of interview conversations into four items: "Recognition of the current life" "Views of religion" "Attitudes towards death" and "Recognition of post-death world". When compared between the elderly in the facilities and those living at home, there was no significant difference in any category. It was speculated that, so long as the background of the target person is considered, the recognition of any individual towards life and death is approximately the same. The grasp their feelings towards peaceful death, we suggest that a care nurse should listen carefully to their views on life and death.

Keywords: the elderly, current life, view of religion, view of life and death, peaceful death
高齢者、現状の生活、宗教観、死生観、安寧な死

はじめに

現在、日本人の平均寿命は、男性 80.5 歳で世界 3 位、女性 86.8 歳で世界 2 位の長寿国である。それは、高齢者の絶対数が多くなり、また多死時代の到来とも言える。高齢期が長くなったことを示しており、その間の安寧な期間がどれだけ維持されるかが重要な視点と考えられる。中川¹⁾は「人生の時間が無限に続くとする錯覚が現代日本人には蔓延しているように思う」と述べ、日本人は高齢期を迎えてもなお、死を真正面から取り組む心構えが不十分であることを示唆している。

姉の自殺を体験した渡辺²⁾は著書『なぜ死ぬか』の中で、死とは「恐怖に襲われる、底知れぬ寂しさと言っても良い」と述べ、また「死の恐怖を受け止めながら正面から死を見詰めることが、人間として大切なのではないだろうか」と死への対処について直言している。

さらに「夜目覚めた時のどうしようもない不安」はこのような心理状態なのかもしれない。ハイデッガー³⁾は死に対する不安について「死の存在は本質的不安」であり、「不安の相手は、何者でもなく、またどこにもいない」。そして「その情態性はある人にとっては気味が悪い、即ち我が家のようなではない、その人は不安のなかにいる」と論述し、対象のない不安である死に対する情態を分析している。高齢期とは加齢と共に対象喪失が続き、喪失対象として死が身近な存在となることで、不安な状況に有ることが推測される。

加地⁴⁾は、「宗教とは死と死後の説明である」と定義し、それは全世界に共通であるが、しかしながら 2012 年アメリカの調査機関「ピュー・リサーチ・センター」は、日本人の 57%が無宗教、36.2%が仏教で、世界 4 位の無宗教国家であると報告している。日本人は、諸外国に比べ、日常生活において宗教家の関与が少ない。そのようななかで、療養生活の支援、健康支

*Email: t-sugihara@osaka-aoyama.ac.jp
〒562-8580 箕面市新稲2-11-1

援の役割を担う看護職は、安寧な「良い死」を迎えるための終末期のケアとして宗教的関わりを担っている現状が多いと推察される。

多死時代となった現在、高齢者の死と死後に対する態度の実態を知ることは、きわめて重要である。看護者はあの世へ旅立つ相手に対して思いやりのある言葉かけをすることは、安寧な心情へ導くことになり「良い死」への対応に必須であると考えられる。

II. 調査目的

高齢者が安寧な気持ちで最期を迎えられるために、高齢者の「生と死に対する態度」を把握することを調査目的とした。

III. 用語の定義

1. 死と死後に対する態度

加治⁴⁾は、日本では固有のアニミズム（汎霊説）信仰、中国経由でのインド仏教伝来は仏教の輪廻転生、儒教の招魂再生・祖先祭紀、道教の不老長生の死生観が習合した独特な展開をし、お墓を魂の安息所としているのではないかと述べている。祖先と同様に、いずれ自分たちも、先祖の魂が位牌にとりつき極楽浄土から我々の家に還ってくるように、自分たちもまた、家へ還ってくると考えたのであろう。このような心情が高齢者に内在していると類推される。安寧な死を迎える支援を模索する本研究の方向性と合致していると考えられる。

本調査では上記のような日本仏教の態度を定義として援用することとした。

2. 良い死

本調査において、永六輔⁵⁾の詩の中の「 」で示された内容を良い死と定義した。

人は死にます

必ず死にます

「その時に 生まれてきてよかったと思いながら

死ぬことができるでしょうか

そう思って死ぬことが大往生だと思います」

IV. 調査方法

1. 対象者

A県内にあるショートステイ施設利用者9名（以下施設高齢者）と地域で自立生活している高齢者（以下在宅高齢者）9名を対象として調査した。

2. データの収集期間：2016年6月から2016年8月

3. データの収集方法：半構造化面接

1) 利用者への面接はすべて個室で行った。在宅高齢者には自宅へ訪問しプライバシーが保てる環境で面接した。面接は対象者の同意を得て記録し、後日逐後語録を作成した。

2) 半構造化面接の内容は、2011年朝日新聞社による「日本人の死生観」調査の51項目から下記に示す17項目を選択した。

また、各質問項目「はい」「いいえ」「その他・答えない」の3択で回答を得、それらを集計して、施設高齢者と在宅高齢者との間で比較検討した。なお、死のイメージならびに、あの世のイメージは例示に加え自記式記述を推奨した。

・質問項目

- (1) あなたは今の生活に満足していますか。
- (2) あなたはこれからの人生を考えた時不安を感じますか。
- (3) あなたは現状を運命として受け入れますか。
- (4) 宗教はあなたが生きるために大切なものだと思いますか。
- (5) あなたは自分自身の理想的な死の迎え方を考える方ですか。
- (6) あなたは自分の死の迎え方を自分で決めておきたいですか。
- (7) あなたは死は怖いですか。
- (8) 死のイメージ
 - ①家族や知人との永遠の別れ
 - ②この世からの消滅
 - ③死に至る痛み苦しみ
 - ④新たな世界への出発
 - ⑤現世での苦悩からの解放
 - ⑥バラ色のあの世
 - ⑦先に逝った人との出会い
 - ⑧その他（自記式）
- (9) あなたは宗教を信じることにより、死の恐怖がなくなり、和らいだりすると思いますか。
- (10) あなたは孤独死することを心配していますか。
- (11) あなたはこの世とは違う死後の世界や「あの世」はあると思いますか。

(12) あるとすればあなたにとって「あの世」とはどんなイメージですか。

①永遠 ②無 ③生まれ変わり ④ざんげ ⑤やすらぎ ⑥苦悩

⑦その他（自記式）

(13) 人間は死んだ後も霊魂が残ると思いますか。

(14) 自分の葬儀は何らかの宗教に基づいた形式にして欲しいですか。

(15) あなたは家族の葬儀や追悼行事について相談できる宗教家がありますか。

(16) 自分のお墓についてどのように考えていますか

(17) 両親や祖父母のお墓を守るのは子供の義務だと思いますか。

4. 分析方法

面接時にはその内容を記録し、死生観に関連する言葉をコード化し、構成概念として集約し、カテゴリ化して分析した。

5. 倫理的配慮

本調査は、大阪青山大学研究倫理審査委員会の承認（承認番号：2801）を受けて実施した。本調査は事前に調査対象者の施設長に対して、文書で調査の主旨を説明し、文書にて同意を得た。対象者は事前に施設長によって選定された。対象者には調査への参加、不参加は自由であることを知らせ、当事者の署名をもって同意を得た。なお、調査紙は個人が特定できないようにデータ化し、そのUSBメモリーは研究者が管理した。

なお、朝日新聞社が公表した「日本人の死生観」の調査結果の使用については、担当者の同意を得ている。

V. 結果

1. 対象の属性

対象の高齢者はA県B市にある介護短期入所施設利用者（施設高齢者）とA県C市に居住する自立している高齢者（在宅高齢者）それぞれ9名であり、対象者の属性は表1に示した。独居は施設利用者1名、在宅者2名、その他は家族同居であった。介護保険認定は施設利用者が8名、身体障害手帳保持者が1名であったが、一方、在宅高齢者にはいずれも該当者はいなかった。

2. 高齢者の人生に対する認識

高齢者の生き方に対する態度について、「現状の生活に対する認識」、「宗教に関する認識」、「死に対する認識」、「死後の対する認識」の4カテゴリーに分類した。肯定的回答を2点、否定的回答を1点、その他・回答なしを0点として集計した。

1) 現状の生活に対する認識

施設高齢者7名(77.8%)、在宅高齢者は6名(66.7%)が現状の生活に満足しており、運命として受け入れている。しかし、これからの人生に対しては、不安があるが施設高齢者6名(66.7%)、在宅高齢者5名(62.5%)と共に半数を超えていた。

2) 宗教認識

施設高齢者、在宅高齢者共に5名(55.6%)が宗教は生きるために大切なものだと思っており、宗教を信じることで死の恐怖が和らぐと思っている割合は、施設高齢者は7名(77.8%)、在宅高齢者は4名(44.4%)であった。

葬儀に関して、施設高齢者の方が在宅高齢者よりも、葬儀を希望する傾向が高かった。

表1 対象者等の属性

	施設高齢者	在宅高齢者
性別	女性9名	女性9名
平均年齢	80.6歳（60～98歳）	73.4歳（66～88歳）
一人暮らし数	2名	1名
介護保険認定	介護度1：4名、介護度2度：2名、 介護度4：2名	0名
身障者手帳保有者	1級：1名	0名
居住地（A県）	施設所在地であるB市	在宅高齢者が居住しているC市
健康状態	医師の疎通が可能な介護施設利用者	自宅で自律した生活をしている 高齢C市民

表2 高齢者の死生観

	施設高齢者(N=9)			在宅高齢者(N=9)		
	はい	いいえ	その他	はい	いいえ	その他
1) 現状生活認識						
①あなたは今の生活に満足していますか	7	2		6	2	1
②あなたはこれからの人生を考えた時不安を感じますか	6	3		5	3	1
③あなたは現状を運命として受け入れますか	7	2		5	3	1
2) 宗教認識						
④宗教はあなたが生きるために大切なものだと思いますか	5	3	1	5	4	
⑨あなたは宗教を信じることにより死の恐怖がなくなり、和らいだりすると思いますか	7	2		4	3	2
⑭自分の葬儀は何らかの宗教に基づいた形式にして欲しいですか	7	2		4	4	1
⑮あなたは家族の葬儀や追悼行事について相談できる宗教家がありますか	6	3		3	4	2
3) 死に対する認識						
⑤あなたは自分自身の理想的な死の迎え方を考える方ですか	7	1	1	5	1	3
⑥あなたは自分の死の迎え方を自分で決めておきたいですか	8	1		8	1	
⑦あなたは死は怖いですか	2	7		1	5	3
⑩あなたは孤独死することを心配していますか	1	8		1	7	1
4) 死後に対する認識						
⑪あなたはこの世とは違う死後の世界や「あの世」はあると思いますか	9			4	3	2
⑬人間は死んだ後、霊魂が残ると思いますか	6	3		6	2	1
⑯自分のお墓が先祖の墓に入ると考えていますか	8	1		7	1	1
⑰両親や祖父母のお墓を守るのは子供の義務だと思いますか	7	2		4	4	1

3) 死に対する認識

自分の理想的な死の迎え方を考えるのは、施設高齢者7名(77.8%)が、在宅高齢者5名(55.6%)よりも多かった。自分の死は自分で決めておきたいと回答したのは、両群ともに8名(88.9%)であった。「死が怖くない」、「孤独死に対する不安がない」との回答は両群とも多かった。

4) 死後に対する認識

「あの世があると思う」は、施設高齢者が9名全員、在宅高齢者は4名(44.4%)であり、「霊魂が残ると思う」は、施設高齢者、在宅高齢者共に6名(66.7%)であった。「先祖の墓に入る」は、施設高齢者が8名(88.9%)、在宅高齢者が7名(77.8%)、「墓守」については施設高齢者7名(77.8%)、在宅高齢者4名(44.4%)が子供の義務だと回答した。

3. あの世と死に対するイメージ

1) 死のイメージ

死に対するイメージでは、施設高齢者は「先に逝った人との出会い」が3名(30.0%)、「家族や知人との永遠のお別れ」、「この世からの消滅」、「死に至る痛み

表3 高齢者の死のイメージ

高齢者の死のイメージ	施設高齢者	在宅高齢者
家族や知人との永遠のお別れ	1	3
この世からの消滅	1	1
死に至る痛み苦しみからの解放	1	
新たな世界への出発	1	1
現世での苦悩からの解放	1	
バラ色のあの世		1
先に逝った人との出会い	3	1
その他：回答なし	2	2
小計	9	9

表4 高齢者のあの世のイメージ

高齢者のあの世のイメージ	施設高齢者	在宅高齢者
永遠	1	
無	1	6
生まれ変わり	3	
ざんげ		
安らぎ	5	3
苦悩		
その他		1
小計	10	10

複数回答による

苦しみからの解放」、「新たな世界への出発」、「現世での苦悩からの解放」回答なしが各1名(11.1%)、一方、在宅高齢者では「家族や知人との永遠のお別れ」が3名(30.0%)、「この世からの消滅」、「新たな世界への出発」、「バラ色のあの世」、「先に逝った人との出会い」、「回答なし」が各1名(11.1%)であった。

2) あの世のイメージ (表4)

あの世のイメージは施設高齢者では「安らぎ」が5名(50.0%)、「生まれ変わり」が3名、「永遠」「無」が各1名(33.0%)であった。在宅高齢者では「無」が6名(66.7%)、「安らぎ」が3名(33.3%)、「その他」が1名(11.1%)であった。

4. 死の認識についてのアンケート結果 (表5)

生死の認識についてのアンケート結果を表5に示した。施設高齢者と在宅高齢者との間で、「現状認識」「宗教的認識」「死に対する認識」のいずれも有意差は認められなかった。

VI. 考察

表2に示すように、現状の生活に対する高齢者の多くは現状を運命として受け入れており、施設高齢者も在宅高齢者も今の生活に満足している。しかしながら、これからの人生に対しては施設高齢者、在宅高齢者共に「これからの人生には不安を持っている」と答

えていた。現在の高齢者は日常の生活では満足しているようでも、内心は将来に対して不安な心情を抱いている。高齢者にとって将来の主な不安とは健康問題であり、終末期医療に関するものと推察される。島田ら⁶⁾は、アメリカでは調査対象者の3分の2のリビングウイルが法的に効力を持つ代理決定者の指名がされているが、日本では家族に意思決定を確認することが多いと指摘している。このように、終末期における当事者の事前指示の環境が整っていないことが不安な心情を抱く要因になっていると思われる。

宗教に関する認識に関して施設高齢者も在宅高齢者も、宗教は生きるために大切だという思いが強い。しかし、宗教によって死の恐怖が和らぐや、宗教の形式に則った葬儀やそのことを相談する宗教家の存在などは施設高齢者の方が宗教へのかかわりが強い。宗教家の役割について、武田ら⁷⁾は宗教活動の中で「門徒からの悩みについて相談を受ける」ことが重要であるし、「話を聞く」関わりと「ただ念仏」において加治が指摘した「死後の世界」の役割を果たすことで門徒に安心感を与えようとしていると述べている。このような関わりの結果、「死が怖くない」「あの世がある」「靈魂の存在」についての割合が、施設高齢者と在宅高齢者との間には差があるが、「死」に対する「心の準備」が多くの高齢者でできていると言えよう。岸本⁸⁾は「死もそのつもりで心の準備をすれば、耐えられるのではないだろうか」と述べている。吉田⁹⁾は、「靈魂」については19世紀初頭に国学者平田篤胤が「人は死ぬと神霊になる」と「霊」の存在を著述し、人の靈魂が

表5 施設・在宅別生と死の認識

		施設高齢者	在宅高齢者	フィッシャ検定
現状認識	1 生活に満足	16	14	ns
	2 人生への不安	12	11	
	3 運命受容	16	13	
宗教的認識	4 宗教は大切	13	10	ns
	9 宗教は死の恐怖低減	16	11	
	14 宗教形式による葬式	16	12	
	15 葬儀に関する宗教家の存在	15	10	
死に対する認識	5 理想的死の捉え方	15	11	ns
	6 最後は自分で決める	17	17	
	7 死は怖い	16	11	
	10 孤独氏は怖い	17	15	
死後に対する認識	11 あの世はある	18	10	ns
	13 靈魂は残る	15	14	
	16 自分のお墓は先祖の墓へ	17	15	
	17 墓守は子供の義務	16	12	

ns 有意差なし 数字は肯定を2点としたスコアを表す

不死であることを論述している。その考えは、本調査においても施設高齢者、在宅高齢者共に7割以上の高齢者が靈魂は死んだ後も残ると回答しており、現在に至るまでその考えが内在していることが示された。

「あの世のイメージ」は表4の示したように施設高齢者では「安らぎ」「生まれ変わり」「無」、「永遠」の順であるのに対し、在宅高齢者は「無」「安らぎ」の順であった。施設高齢者の一人はあの世は安らぎであり「あの世では友達をいっぱい作りたい」と語り、別の一人は三途の川を渡った広い広場で石が積み重なっているところがあの世の場所、マンゴーが実るハワイみたいな処だといい、しかし、他の一人はだれも体験していないのでわからないが花が咲き乱れたきれいな処だろうと話した。在宅高齢者の中には、昔の自分に会いたいと語った人もいた。そして、若い時にフランスに住んでいた高齢者は海に散骨にしてくれれば長い時間をかけていけると楽しそうに語る人もいた。

表3の「死のイメージ」では施設高齢者は先に逝った人との「出会い」、在宅高齢者では家族や知人との永遠の「お別れ」が多かった。「安らぎ」の場であり、先に逝った人と出会えると考えれば、「安寧な死」への方向性が示唆できると考えられる。また、「誰もが死後の世界から帰った人がいないことは、とてもよい処だからじゃない？だから死ぬのは怖くない」と87歳の在宅高齢者の語りから、安寧な死を迎えるための心構えについて暗喩を得た。長命で健やかに生きる人から死後への態度を聴くことは、安寧な死を迎えるための示唆を得る機会になると考えられる。柏木¹⁰⁾は「聴く」には「個人的な関心を持ってしっかりと聴く」ことが大切であると述べている。高齢者に接する機会が多い看護職として「安寧な死」のためにも安心感をもたらす「聴くこと」がきわめて重要である。

VII. 結論

一般的に終末期に最も近い高齢者に対し、安寧な死を迎えられるための支援には「生と死に対する態度」を把握することは重要である。そのためには、個人的な関心を持ってしっかりと聴く態度こそが求められている。

文献

- 1) 中川恵一. 自分を生ききる 日本のがん治療と死生観. 小学館. 2006, 3.
- 2) 渡辺 格. なぜ死ぬか. 同文書院. 1993, 9-16.
- 3) ハイデッガー. 存在と時間. 岩波文庫. 1976, 260.
- 4) 加治伸行. 沈黙の宗教, 筑摩書房. 1995, 29.
- 5) 永 六輔. 大往生. 岩波文庫. 1995, 196.
- 6) 島田千穂, 中里和弘, 荒井和子他. 終末医療に関する事前の希望伝達の実態とその背景. 日本老年医学会雑誌. 2015, 52, 79-84.
- 7) 武田正文, 岡本祐子. 浄土真宗僧侶の宗教活動が門徒のメンタルヘルスに果たす役割. 広島大学心理学研究. 2010, 10, 289-99.
- 8) 岸本英夫. 死を見つめる心, 講談社. 2008, 31.
- 9) 吉田真樹. 平田篤胤 靈魂のゆくえ. 講談社. 2009, 118-24.
- 10) 柏木哲夫. 生きていく力, いのちのことば社. 2005, 70.